

経営史学会 関西部会<部会大会 2009>

2009年8月1日(土) 10:00~17:10

於 大阪産業大学 梅田サテライト (大阪駅前第三ビル 19階)

*** 例年と会場が異なりますので、ご注意ください。**

日本企業の海外展開

—輸出から現地生産への途—

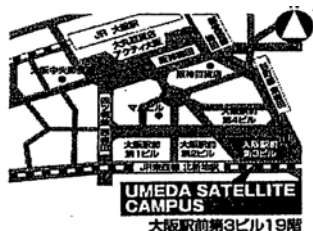
オルガナイザー： 出水 力 (大阪産業大学)

日本の戦後復興は軍需産業の解体から出発した。軍需技術を民需技術に転換する過程で、欧米からの技術導入、アメリカから品質管理を学び、それらを日本的な方法で磨きをかけた。「安かろう、悪かろう」と揶揄された日本の工業製品のイメージを一新し、メイドイン日本は今や高品質の代名詞になった。少資源の日本は原材料を海外から輸入して、加工により付加価値を生み出し、輸出する加工貿易が戦後の経済の高度成長を支えた。

為替レートも1949年から1971年まで1\$ = 360円に固定され、圧倒的な価格競争力で欧米の先進国に工業製品の輸出を拡大した。70年代には工業製品のみならず、途上国への政府開発援助による橋梁、ダム、電力の送配電設備、石油化学プラント、セメントプラントなど大型のプラント輸出が、本格化した。メカトロニクスの時代に入ると、高機能な工作機械、液晶テレビ、DVDなど幅広い工業製品が輸出されている。

しかし、耐久消費財など民需品は1980年代中ごろになると、日本国内の人件費の高騰などの要因に加え、1ドルが100円前後の急激な円高局面を迎えた。高い技術力の要る高級品や価格競争力のある製品を除き、普及品の海外現地生産にシフトする動きが目立ち、90年代後半からこの流れはさらに加速された。海外に独資あるいは合弁の子会社を設立し、生産技術やブランド料、さらには技術指導料のほか投下資本に応じた配当あるいは利益を配分する海外経営の時代に入った。

今大会はアジア、アメリカ、EUに進出した日系企業の実態についての諸調査、さらには現場のトップリーダー経験者からの貴重な報告を以て、これらの論点を検討していく。



- 【交通】
- JR「大阪駅」より徒歩 約5分
 - JR「北新地駅」より徒歩 約5分
 - 阪急「梅田駅」より徒歩 約9分
 - 阪神「梅田駅」より徒歩 約4分
 - 地下鉄御堂筋線「梅田駅」より徒歩 約5分

〒530-0001 大阪市北区梅田1-1-3 大阪駅前第三ビル19F
TEL: 06(6442)5522 FAX: 06(6442)5524

経営史学会・関西部会 部会大会 2009

日 時： 2009年8月1日(土) [開場・受付 10:00～]

オルガナイザー： 出水 力氏 (大阪産業大学)

大会司会： 西川 浩司氏 (龍谷大学) ・ 岡部 芳彦氏 (神戸学院大学)

会場： 大阪産業大学 梅田サテライト (大阪駅前第三ビル 19階)

*例年と会場が異なりますので、ご注意下さい。

問題提起 出水 力氏 (大阪産業大学)

10:15～10:25

第一報告 「戦後日本企業の東南アジア現地経営

10:25～11:10

－タイにおける松下電器を中心として－」

藤田 順也氏 (神戸大・経営学研究科研究員)

第二報告 「マレーシア松下電器の経営

11:15～12:00

－1987～93年の回顧－」

秋田 忠志氏 (マレーシア松下電器元社長)

<昼休み： 12:00～13:00>

第三報告 「素材型産業から読む東アジアの工業化と技術形成

13:00～13:45

－機械工業との関わりにおいて－」

高林 二郎氏 (川崎重工業元マネージャー)

第四報告 「ミノルタのアメリカへの海外展開」

13:45～14:30

釣島 平三郎氏 (太成学院大学/在米ミノルタ・システム研究所元社長)

第五報告 「欧州における日本企業の進出形態と組織再編」

14:35～15:20

東良 徳一氏 (大阪産大/独プライスウォーターハウス会計事務所 元共同経営者)

「コメント 一」： 中川 涼司氏 (立命館大学)

15:30～15:40

「コメント 二」： 廣田 義人氏 (大阪工業大学)

15:40～15:50

「コメント 三」： H. R. ブングシェ氏 (関西学院大学)

15:50～16:00

<質問票回収+休憩： 16:00～16:10>

全 体 討 議

16:10～17:10(閉会)